

# 日本映画における中国古典の受容と変容

——映画『白夫人の妖恋』と『白蛇伝』を中心に——

劉 韻 超

## 要 旨

本論では、日本人が中国の古典文学「白蛇伝」をどのように受容したのかを、中国古典に取材した日本映画、『白夫人の妖恋』（1956年）と長編漫画映画『白蛇伝』（1958年）に注目して考察を試みた。その結果『白夫人の妖恋』では、白夫人の「愛」を強調する一方、許仙の人間の弱さや愚かさが対比的に描写されていることが分かった。また、『白蛇伝』は子供向け映画ということもあり、話がシンプルで、プロットもキャラクターの形成もディズニー映画の影響を色濃く受けていた。そして、従来検討されてこなかった小青は、映画では原典と異なり、積極的に白娘子のために行動する脇役に成長するのが見られるが、その変化は1950年代の女性解放の意識に影響を受けた可能性が指摘できる。

キーワード： 白蛇伝／日本映画／受容／変容／中国古典

## 一、はじめに

「白蛇伝」は、白蛇が人間の女性に姿を変えて人間の男性に恋する物語で、中国四大民間伝説の一つ<sup>1</sup>である。その話柄は南宋時代から民間で語られ、小説、芝居、映画など、様々な形で脚色・翻案されている。

この話柄が初めて小説として記録されたのは、明代に編纂された短篇白話小説集『警世通言』第28巻「白娘子永鎮雷峰塔」である。その後『警世通言』は江戸時代に日本に舶載された<sup>2</sup>。読本作家の上田秋成はこれに基づいて、舞台を日本に移した翻案作品「蛇性の姪」（『雨月物語』所収）を発表した。現代では、林房雄の『白夫人の妖術』（1948年）が挙げられる。

一方、中国では清代の崑曲<sup>3</sup>をはじめ、京劇や越劇などの地方劇に取り上げられ、様々な形で演じられた。特に主人公である白娘子のキャラクターが時代とともに変貌を遂げ、物語は大きく変化していった。その中でもっとも広く伝わったのは方成培の『雷峰塔伝奇』（1771年）である。方の台本は中国古典十大悲劇の一つと呼ばれ、白娘子の性格はより善良で愛すべきものに変えられるとともに、多くの見せ場も付け加えられた。地方劇のみならず、後世の映画やドラマなども『雷峰塔伝奇』の筋を下敷きにしたといっても過言ではない。

映画としての受容を確認すると、中国では、1926年に『義妖白蛇伝』（邵醉翁監督）が最初に作られて以来、『白蛇伝』（岳楓監督 1962年）<sup>5</sup>や『青蛇転生』（ツイ・ハーク監督 1993年）<sup>6</sup>などの「白蛇伝」を題材とした映画は十数種類のバージョンを持っている。一方、日本でも「白蛇伝」はしばしば映画化された。古い順に見ていくと、まず1921年に谷崎潤一郎が上田秋成の原作を脚色したサイレント長篇劇映画『蛇性の姪』（栗原喜三郎監督）が挙げられる。その後、日本映画黄金期にあ

たる1950年代に、溝口健二も「浅茅が宿」と「蛇性の姪」の2編に取材して<sup>7</sup>映画『雨月物語』(1953年)を撮り、同作はヴェネチア国際映画祭で最優秀外国作品賞を受賞するなど、欧米においても広く知られる日本作品となった。その三年後の東宝と香港の映画製作会社ショウ・ブラザーズとの合作映画『白夫人の妖恋』(豊田四郎監督 1956年)は、当時の特撮技術を駆使して作られた。そして1958年、日本初のカラー長編漫画映画『白蛇伝』(藪下泰司監督)は人気を博し、海外でも認められ、各地の映画祭で次々と賞を受けた<sup>8</sup>。

小説については、「白蛇伝」物語の変遷や発展の研究<sup>9</sup>、あるいは白話小説「白娘子永鎮雷峰塔」と上田秋成の翻案小説「蛇性の淫」の比較研究<sup>10</sup>などが盛んに行われているが、映画を対象とした研究は大きく立ち後れている。たとえば、「蛇」の形象に注目し、日本ではその形象が如何に受容・伝承・変容されたかを論じた曾秋佳の研究<sup>11</sup>や、川島郁夫の「『白蛇伝』映画閑談」<sup>12</sup>は、日本で作られた「白蛇伝」を題材とした一連の映画を紹介しているものの、そのストーリーの流れや脚本の概略を述べているに過ぎない。さらに注目すべきは、日本映画では「白蛇伝」を映画化した際に、日本人の観客に配慮して改作が行われたという点である。その改作されたプロットの中にこそ、日本映画がどのように中国の古典文化を受容し、そして変容させたかを窺うヒントが潜在すると思われるが、改作とその意義に関しては今まで殆ど論じられる事はなかった。

そこで本論では、日本映画がいかに中国の古典文学「白蛇伝」を改作したか、及びその意味が何であったかをまず考察することとしたい。その上で『白夫人の妖恋』と『白蛇伝』を研究対象とし、先行研究で等閑視されていた白娘子以外の登場人物についての分析を行いたい。許仙や小青といったキャラクターに注目し、原典<sup>13</sup>と異なるところを取り出して比較することによって、そのキャラクターがどのように表象されたか、及び改作の意味がより明らかになることと思われる。

## 二、日本の「白蛇伝」映画

### 1 映画『白夫人の妖恋』(1956年)<sup>14</sup>

#### (1) あらすじ

西湖の畔に住んでいる許仙は、ある雨の日、美しい白夫人に自分の傘を貸したところ、その女性から結婚を申し込まれてしまう。はじめ許仙はその縁談をことわったが、婚礼の支度金を手渡されると、喜んで白夫人の思いを受け入れた。しかし、許仙がもらったのは盗んだ銀であった。罪を問われた許仙は蘇州へ流罪となり、旅館で働き始める。許仙を慕う白夫人は蘇州まで追ってきて、二人は縁を結んだ。

その後、許仙は薬屋を開業して幸せな生活を送っていたが、茅山道人という道士に、妖怪にとり憑かれていると警告される。白夫人は茅山道人と戦って勝ったが、端午節の雄黄酒に酔い、白蛇の身をあらわしてしまった。許仙は驚いて死んでしまう。白夫人は許仙を生き返らせるために必死に回生草を求める。蘇った許仙は茅山道人に唆され、法海禅師の金山寺に逃げ込んだ。白夫人と小青は法海禅師と戦い、金山寺を水攻めにする。が、許仙が水に落ちたのを見た白夫人は呪文を止め、結局戦いに負けて死ぬ。許仙はようやく白夫人の愛の深さを知り、あとを追って自殺した。許仙と

白夫人の霊は一緒に空に昇っていった。

## (2) 映画について

『白夫人の妖恋』は、戦時中に『警世通言』の翻訳作業をしていた京城帝国大学の辛島驍の翻訳文に、辛島の知人である林房雄が潤色を加えた小説『白夫人の妖術』<sup>15</sup>を更に映画化するために再編集されたものである。邱淑婷の山口淑子へのインタビューによる<sup>16</sup>と、この映画の企画は山口淑子によって提案されたものだという。当時アジアで上映された蛇物語の大半は、妖蛇が人間を魅惑するホラー映画になっており<sup>17</sup>、「白蛇伝」の翻案はごく少数だった。それゆえ、本格的な「白蛇伝」映画を作って「中華人民共和国にも輸出したい」<sup>18</sup>という念頭の下で映画『白夫人の妖恋』の製作が始まった。

映画監督の豊田四郎は、文学作品を映画化することでよく知られていた。彼は1935年に松竹から東宝に移り、石坂洋次郎作のベストセラー小説を映画化した『若い人』(1937年)がヒットしたことで一流監督として認められるようになった。主人公の白夫人は戦時下に李香蘭の名で知られた山口淑子で、許仙は豊田四郎の多くの文芸作品に出演した池部良、白夫人の侍女小青は八千草薫が演じた。絢爛たる色調が特徴のアメリカのイーストマン・カラーを駆使した日本初のカラー特撮映画であり、日本や香港でも興行的に大成功を収め、第6回ベルリン国際映画祭で最優秀色彩映画技術賞を受賞した。円谷英二はこの映画のため、日本映画史上初めてブルーバック合成<sup>19</sup>を使用しており、特撮監督を務めた円谷英二の貢献が無視できないと言われている。

なお、東アジアへの進出を意図していた<sup>20</sup>東宝がショウ・ブラザーズを提携相手として選んだのは、ショウ・ブラザーズが大映と合作して中国古典劇『楊貴妃』(溝口健二監督 1955年)を製作した実績があった<sup>21</sup>ためであろう。その後、ショウ・ブラザーズも同じ題材を使って独力で『白蛇伝』(岳楓監督 1962年)を制作した。

## 2 長編漫画映画『白蛇伝』(1958年)<sup>22</sup>

### (1) あらすじ

幼い時、許仙は道端で売られていた白蛇を買ったが、大人に叱られて仕方なく捨てた。大人になった許仙がある日、笛を吹くと、その音に応えたかのように胡弓が鳴り始めた。胡弓に惹かれた許仙は、その演奏者を探しに行く。その主は人間に化けた白蛇の白娘であった。出会った二人は互いに慕い合い、結婚を決めた。白娘のお供である青魚の精・小青は、祝いのために官府から宝石を盗んで婚約の印として二人に贈る。許仙と白娘の恋を法力で知った高僧・法海は、許仙を救おうと考えて宝石のことを告発し、許仙は蘇州へ流罪となった。愛する許仙をおって白娘も蘇州へ向かうが、法海と遭遇し、戦いで敗れた。逃げていく白娘を見た許仙は、彼女を追ううちに崖から落ち、絶命してしまう。許仙を蘇らせるために、白娘は龍王に、「自分が妖怪でなくなり、人間になる」という条件で許仙を生き返らせる花を求める。一方、小青は深海の王に頼んで大嵐を起こしてもらい、法海を襲って許仙を取り戻そうとする。花を届けようとしていた白娘は、この嵐に巻き込まれ

てしまう。小青たちによって命を蘇えらせる花は許仙のもとへ届き、許仙は息を吹き返す。許仙は溺れている白娘を見つけると、たちまち海に飛び込んで白娘を助けた。この様子を見た法海は、白娘が人間へと生まれ変わったことを知り、白娘を見逃した。

## (2) 映画について

日本製の「白蛇伝」で最も人気を博した作品は、実はこのアニメーション映画である。東映動画製作によって作られた『白蛇伝』は、1958年に劇場公開され、文部省選定（少年向・家庭向）映画に選ばれた。

この作品は、東映動画の「長編漫画映画」の第一作であり、日本初の総天然色アニメーション映画でもあった。中国の説話「白蛇伝」を題材にし、「漫画映画」を制作しようとしたきっかけは、実写映画『白夫人の妖恋』が香港で大変人気を得たことである。それで香港の映画界から『白夫人の妖恋』をアニメ化する企画が東映に持ち込まれた。しかし、大川博は香港の下請けとなることをきらい、独自の本格的な漫画映画を作ろうと決心した。そして、東映教育映画部を中心に2時間規模のカラー漫画映画を目指して『白蛇伝』の企画がスタートした。しかし、当時の日本には、アニメーションの専門家が多くはなかったため、この試みは、その時の常識から考えれば無謀だといっても過言ではなかった。東映は外国の動画の研究、動画スタジオの建設、スタッフの養成などを積み重ね、2年がかりで『白蛇伝』を完成させた<sup>23</sup>。

## 三、中国の原典と映画の比較検討

本節では、原典である方成培の『雷峰塔伝奇』との比較によって、映画『白夫人の妖恋』、及び長編漫画映画『白蛇伝』の改作意図の検討を試みる。その際、混乱を避けるために、白娘子を、『白夫人の妖恋』では「白夫人」、『白蛇伝』では「白娘<sup>バイニャン</sup>」と呼称して弁別することにする。

### (1) シークエンス<sup>24</sup>の構成

三作品に見られる大きな違いは、シークエンスの構成である。映画あるいはアニメーションの内容を見ると、シークエンスが削除されているだけでなく、追加されているものもある。また、内容が同じでも細部が異なる場合もある。「白蛇伝」は昔から演劇として上演されることが多かったため、シークエンスの分類は演劇によるものである。

以下に対比表を示す。(記号「―」は該当するシークエンスが存在しない事を意味する。\*は変更を受けたシークエンスを示す。)

作品 シー クエンス	『雷峰塔伝奇』	『白夫人の妖恋』	『白蛇伝』
縁起	前世の許仙が死にかけている白蛇を救った (方成培の台本にはないが、その以降の芝居や小説などではしばしば見られる)	—	許仙は幼い頃に売り物の白蛇を買い取って救った
傘借り	清明節に墓参りに行った許仙が雨で濡れた未亡人白娘子に傘を貸す	雨の日に許仙が雨で濡れた白夫人に傘を貸す	— * 許仙が拾った胡弓を持ち主である白娘に返す
縁組み	許仙が結婚を決めた後、白娘子から盗んだ金をもらう	はじめ許仙は結婚を断ったが、小青から金をもらった後、白夫人の思いを受け入れた	結婚を決めた後、小青は官府から盗んだ宝石を二人に贈る
薬屋開業	許仙を追ってきた白娘子と結婚した後、白氏の勧めによって薬屋を開業する。二人は幸せな生活を送る	許仙の愛情を取り戻すために、薬屋を繁栄させたい白夫人は町に毒を撒く	—
道士との対決	道士が許仙に妖怪退治のお札を贈る。発見した白娘子は道士を宙に吊す	道士が許仙に妖怪退治のお札を贈る。発見した白娘子は道士を宙に吊す	* 白娘は法海に敗れた
雄黄酒	端午節に白娘子は許仙に雄黄酒を強要される。蛇体を見た許仙がショックで死ぬ	端午節に白娘子は許仙に雄黄酒を強要される。蛇体を見た許仙がショックで死ぬ	— * 逃げていく白娘を見た許仙は彼女を追ううちに崖から落ち、絶命してしまう
仙草を求める	許仙を蘇生させる仙草を求めて、白娘子は嵩山を訪れる	許仙を生き返らせるために、白夫人は回生草をくれるよう仙人に頼む	白娘は龍王に、「自分が妖怪でなくなり、人間になる」という条件で許仙を生き返らせる花を求める
水満金山寺	法海に引き留められた許仙を連れ戻すために、法海と戦う。水攻めで負けた白娘子は懐妊しているため法海に見逃された。	金山寺に逃げ込んだ許仙を尋ねる白夫人は法海と戦う。勝利が見えたが、白夫人は水に落ちていく許仙を見て、呪文を止め、結局負けて死ぬ	— * 小青は深海の王に頼んで大嵐を起こしてもらい、法海を襲って許仙を取り戻そうとする
出産	白娘子と許仙の姉は同時に妊娠し、子供同士の結婚を約束する	—	—
雷峰塔	白娘子は出産半月後、法海に雷峰塔の下に閉じ込められた。許仙は出家する	—	—
結末	白娘子の息子は朝廷に雷峰塔を破壊して母を救出してくれるよう請願するが、許されず、鏡に映された白娘子に会うだけで終わる	許仙はようやく白夫人の愛の深さを知り、あとを追って自殺する。許仙と白夫人の霊は一緒に空に昇っていく	白娘が人間へと生まれ変わったことが分かった法海は、二人の愛が本物だと知り、白娘を見逃した

対比表からもわかるように、『白蛇伝』では、原作で重要な位置を占めている「傘借り」、「薬屋開業」、「雄黄酒」、「水満金山寺」の四つのシークエンスを取り込まなかった。また、「道士との対決」では、道士という人物ではなく、法海に取り替えられた。『白夫人の妖恋』でも、「縁起」、「出産」、「雷峰塔」のシークエンスが省略されている。

シークエンスの減少が意味するものは、第一に上映時間上の制約である。佐藤忠雄によると、1950年代の日本では、「大手の映画会社は製作と配給と興行を兼ねていた。映画を大量に製作し、直営の映画館で興行し、また自社と契約している映画館に作品を配給するのである」<sup>25</sup>。そのため、

映画製作会社としては、売り上げを考えると、なるべく一日に多くの回数にわたって映画を上映し、観客の回転率も向上させる必要があった。また『白蛇伝』は子供向けのため、子供の集中力も併せて考えると60分～70分にしなければならなかった。

また第二には物語の簡略化・単純化が挙げられる。特に『白蛇伝』では、子供向けであることから、複雑な内容は避けなければならない、簡略化・単純化によって、観客を飽きさせない、劇としてのエンターテインメント性が増すことになったと言えよう。

さらに、『白蛇伝』における「縁起」、「傘借り」、「結末」などのシーケンスから、子供への「勸善懲悪」、「悲観的な世界観を採用しない」などの「教育的配慮」も見られるだろう。

## (2) 物語の変容

以下、重要な箇所について物語を変更した意図を検討する。

### ① 白娘子と許仙の出会い

「白蛇伝」の物語は最初は怪談であったが、時がたつにつれ徐々に変更を受け、「最終的に動物報恩譚となった」<sup>26</sup>という。『雷峰塔伝奇』はすでに仏教的な色彩があり、白娘子と許仙の出会いが「宿世の因縁」であることが強調された。それ以降の物語バージョン<sup>27</sup>はもっと変化し、白娘子と許仙の結びつきがさらに詳しく加筆されている。二人の縁は出会いの前に起きている。危難中の白蛇が許仙に助けられることがあり、白蛇は許仙を探して恩を返そうとする。しかし、このシーンは『白夫人の妖恋』には存在しないが、『白蛇伝』には存在する。『白蛇伝』が報恩譚のような冒頭を選んだ理由としては、児童への教育上の配慮とも考えられる。

人間に化けた白娘と大人になった許仙との出会いのシーケンスでは、白娘は笛を吹く許仙に胡弓の音で応え、許仙の注意を引く。そして、残された胡弓の持ち主を探すために許仙はあちこちを探し回る。これはディズニー長編映画『シンデレラ』（1950年公開、日本の初公開は1952年）でガラスの靴の持ち主を探す王子のシーンとの類似が見て取れる。

当時、『白雪姫』（1950年）や『バンビ』（1951年）などのディズニー長編映画は、東映のライバル会社・大映などによって次々と興行されて好評を博していた。それに対して、東映動画の初代社長であった大川博は、「東洋のディズニー」となることを宣言し、スタジオを設立した<sup>28</sup>。アニメ『白蛇伝』はこのような背景で制作された。世界進出を目指したアニメーション『白蛇伝』が、世界中の観客の趣味に合わせるため、『シンデレラ』を参照したとしても不自然ではない<sup>29</sup>。

一方、『白夫人の妖恋』は二人の出会いから始まったのである。舟で白夫人はやさしい許仙に一目ぼれた。映画はそこから白夫人の愛への執着に重点をおいて、ストーリーが展開していく。豊田監督も白夫人を「自ら見出した若い男を生命の限りに愛し続けていくという現代人の心の持主です」と説明している。また、白蛇の報恩の要素も取り入れていないため、『白夫人の妖恋』は報恩譚ではなく恋愛物語であることを強く示している。

## ② 白娘子と許仙の結婚

白娘子の家を訪れた許仙は、白娘子の求愛にも違った態度を取った。『雷峰塔伝奇』での許仙は金銭や家族などを考慮して迷ったが、縁談を決めた後に白娘から贈られた白銀を受け取り、帰って結婚の準備をした。しかし、『白夫人の妖恋』の許仙は貧乏であったため、最初にはどうしても白夫人の思いを受け入れられず、小青の叱責を受け、白銀をもらった後、ようやく白夫人の求愛を受けた。『白蛇伝』では、許仙と白娘がもらった宝石は小青からの贈り物であった。

ここで、許仙と小青の分析に移ろう。

『雷峰塔伝奇』と『白蛇伝』の許仙は、素直に自分の本心にしたがって白娘と夫婦の契りを結んだ。しかし、『白夫人の妖恋』の許仙は、軟弱で自分の現状を変えようとする勇気さえない人物と言えるであろう。例えば佐藤忠男は豊田四郎の作品一般における主人公の特性について以下のように述べた。

さまざまに違う主張を持つ小説家の作品を取り上げたにもかかわらず、結果としてそこには豊田四郎監督作品としての一貫した性格もまた生じている。それは、強い女と、弱い男との物語群であるということである……女における母性的要素の強調と彼女たちに思いっきり甘える男の姿とが見られる<sup>31</sup>。

このように、許仙の性格は豊田四郎の従来作品に描かれた男性主人公のそれと一致している<sup>32</sup>ことが分かる。また、許仙が最初に白夫人からの結婚の申し込みを断ったが、金をもらった後、すぐに白夫人との結婚を決めたことも、許仙の優柔不断さと、欲望に左右される人間の弱さを表していると考えられる。

また、『白夫人の妖恋』と『白蛇伝』での侍女・小青のキャラクターは『雷峰塔伝奇』のなかでの小青と鮮明な対比を見せている。『雷峰塔伝奇』の小青は、白娘子のお供にすぎないが、『白夫人の妖恋』の小青は白夫人と許仙の恋路に積極的に介入し、二人の恋の「助力者」と言っても過言ではない。特に許仙が白夫人の求愛を断ろうとする時、小青の彼への諫めは二人の結婚に重要な役割を果たした。一方、『白蛇伝』の小青は白娘のために大嵐を起こして法海を襲い、許仙を取り戻した。つまり、日本版では、小青が積極的に二人を結び付ける役割を果たしており、彼女の助けなくしては、許仙と白夫人は幸福な結末を迎えることができないと言えるであろう。このような女性から積極的に愛を求め、男性を導くイメージは、戦後の民主主義化によってもたらされた「女性解放」の表象と考えてもいいのではないだろうか。実際そのような女性は、戦後の日本映画に頻繁に出てくる。たとえば『今年の恋』（木下恵介、1962年）では、主人公の美香子（岡田茉莉子出演）はさっぱりした性格で、男性を積極的にリードする<sup>33</sup>。また、『太陽の季節』（古川卓巳監督、1956年）の主人公の栄子（南田洋子出演）は、最後には中絶手術で死んでしまうが、恋から逃げ続けている恋人の竜哉と比べたら、彼女はずっと行動力のある人間と思われる。『白夫人の妖恋』のなかの小青も、この女性意識によって改変された登場人物といえよう。確かに映画では、小青は恋愛の当事者では

ないが、助力者として二人の恋愛に主導的な役割を發揮した。

### ③ 薬屋の経営

白娘子と許仙は結婚した後、薬屋を開業する。原典の『雷峰塔伝奇』で白娘子は妖術によって普通の野菜や野草を生薬に変える。ここでの白娘子は夫を支える賢明な妻として描かれている。ところが、『白夫人の妖恋』では、白夫人は許仙の心を取り戻すために薬屋を繁盛させようとする。しかし、自分は医術がないため、小青に命じて町に毒を撒かせる。その毒の特効薬を売ることによって金を儲け、許仙を喜ばせるのである。

このキャラクターに対して、黄愛玲は以下のように指摘している。

『白夫人の妖恋』の男女関係の描写は、香港の映画版より大胆であり、「断橋産子」のシーケンスを削除したかわりに、白娘娘（=白夫人 筆者注）が許仙の愛を一生懸命求める姿（すなわち白娘娘が魔法を使うこと）に集中している<sup>34</sup>。

また、古蒼梧は

李香蘭が演じている白娘娘は中国人が演じている白娘娘に比べれば、愛情に執着するばかりか、きわめて邪悪である。中国演劇にもそういう白娘娘がいるが、中国の観客があまり好まないためか、当代のバージョンの白娘娘はつねに柔らかに美化され、道徳化されている。李香蘭が演じている白娘娘は中国の人情にはあまり合わないものの、より複雑で悲劇的である<sup>35</sup>。

と語っている。

このような手段を選ばず愛を求める白夫人の性格はどこからきたかを考えるとき、上田秋成の「蛇性の姪」が注目される。「蛇性の姪」の真女兒は、「白娘子永鎮雷峰塔」の白娘子の翻案であることが知られている。ところが、白娘子は妖怪であるが、人間に対して悪事を働くことがないのに対して、蛇女の真女兒は豊雄に会いたいために彼の新婚の妻である富子にとりつき、結局富子は病気によって死んでしまう。つまり真女兒は自分の自己中心的な執念で人間を殺したのである。従って、『白夫人の妖恋』の白夫人の性格は真女兒から投影されたものという仮説が成り立つだろう。また、白夫人が冷淡にされても男を追いかけるのは、「道成寺伝説」の蛇身に化けた清姫との類似性が認められる。さらに、小泉八雲の『怪談』でも、しばしばそのような愛に執着して人間に加害を加える妖怪の女性<sup>36</sup>が登場する。愛のために手段を選まない、邪性の持ち主である女性として描かれた白夫人のキャラクターは日本の古くから伝わってきた蛇物語の伝統を受け継いでいると見ることができるだろう。

ところで佐藤忠雄は、豊田四郎監督が作り上げた女の形象について以下のように述べている。



豊田四郎が監督になってから描いた女たちはエロチックな女たちというよりは過剰なまでに母性的な女たちだった。母性的な女たちが、同時に、ふくよかな色香をもって登場するとき、豊田四郎の映画は素晴らしい一級品になるのだった。そこにわれわれは母親の過保護の下で成長した夢見がちのロマンチックな少年だった彼（豊田四郎）の詩的な願望を読み取ることができるが、同時に、それを可能にしたのは、日本の俳優たちの伝統的な型のひとつとして一七世紀の歌舞伎で完成して以来今日まで確固として伝承されている二枚目俳優たちのあり方である。ちなみに、美男で女に愛されるがその女性を不幸から救い出す力や意志には欠ける弱弱しい男たちであり、また、そういう男のために尽くしぬくことを生甲斐とする気丈な女の役及びその演技術の伝統である<sup>37</sup>。

『白夫人の妖恋』のヒロイン白夫人は、許仙のために他人を害することも厭わないのだが、それは一方で日本の伝統文学・演劇に登場する執念深い女主人公の系譜に連なるものであり、また他方で、豊田四郎監督が作り上げた母性にあふれる過保護の女性像の流れを引き継ぐものだと考えられるであろう。

以上論じたようなヒロイン像は、『白蛇伝』には現れていない。このアニメ映画は子供向けの作品であったため、教育上の配慮から以上のエピソードを取り入れなかったのは、寧ろ当然の帰結とも言えるであろう。

#### ④ 物語の結末

『雷峰塔伝奇』の「白娘子と許仙が別れる」という悲劇的な結末に対して、『白夫人の妖恋』も『白蛇伝』も「白夫人／白娘が許仙と一緒にいる」という幸福な結末に変えられている。

『雷峰塔伝奇』の悲劇的な結末の源を求めると、諏訪春雄の「中国江南の蛇信仰と日本」からヒントを窺うことができる。その論によると、中国の江南地方ではもともと蛇に親和的な信仰が抱いていた<sup>38</sup>が、「社会に道教や仏教、儒教が浸透していくと、中国人の蛇信仰もその影響を受けて大きく変容していく。伝統的な蛇を神として崇める観念もそのまま温存される一方では、蛇を邪悪視する考え方も優勢になってくる。そうした中国人の複雑な蛇観の実態は唐代、宋代、明代などに大量に制作された伝奇志怪小説の類にうかがうことができる。」<sup>39</sup>。「白蛇伝」もまさにその一つである。最初のバージョンの「白娘子永鎮雷峰塔」が描いたように、蛇の白娘子は人を傷害したこともないにもかかわらず、妖怪であるため、仏教の僧侶である法海に攻撃されて雷峰塔の下に永遠に埋められた。そして『雷峰塔伝奇』もその結末を受け継いで白娘子と許仙が別れたまま物語が終わった。

ところが、既に述べたように、『白夫人の妖恋』では二人が結ばれるというハッピーエンドに改変されている。この差異について豊田四郎は以下のように述べた。

恋愛の美しさを謳おうとすれば、やはりその美しさのために人間的に解放される。これは当たり前前のことで、そこを脚色の八住さんもごく素直に考えて、二人を結ばせる結果にした<sup>40</sup>。

しかし、白夫人と許仙が結ばれたと言っても、死後に霊となったのことであり、生前の二人は、人間と蛇の境を越えることはできなかったのである。また、『白蛇伝』では、白娘は人間に生まれ変わったため、法海に見逃された。結局、許仙と白夫人と一緒に霊になるか、あるいは白娘が人間になるかのどちらかでなければ、二人は結ばれることができない。結末は違っても、その中心思想となる「人と蛇は共存することができない」という異類婚姻譚の悲劇的な観念は変わらなかったと言うべきであろう。

#### 四、おわりに

最後に『白夫人の妖恋』と『白蛇伝』における改作の意義についてまとめておきたい。

『白夫人の妖恋』は恋愛物語で、母性にあふれる白夫人のような女性像と、気弱で逃げ続ける許仙のような男性像とは鮮明な対比を表わしている。それは豊田四郎の映画で一貫した男女主人公の性質を継承したものと見えよう。また、白夫人は薬屋営業のために町に毒を撒き、彼女の形象が邪性のキャラクターに大きく改変されている。さらに、許仙の金があれば白夫人の求愛を受け、薬屋が繁盛すれば喜び、白夫人が白蛇であることを知ったとたんすぐ逃げ出すような人物像を描き出すことで、人間の欲望と臆病さを主題化した。つまり、映画は白夫人の「愛」を強調する一方、許仙の人間性の弱点についての描写に重点を置いたのである。

『白蛇伝』は子供向け、及び海外進出をめざしたものであった。したがって子供への「教育上の配慮」から、一部のシーケンスが削除されて話がシンプルになり、プロットもキャラクターの形成もディズニー映画の影響を色濃く受けていたと考えられる。

また『白夫人の妖恋』と『白蛇伝』の小青は、『雷峰塔伝奇』の小青より重大な役割を演じており、積極的に白娘子と許仙のために行動する。その女性意識に覚醒した女性像を作り上げたのは1950年代の女性解放の意識に影響を受けたためと推察される。そして、映画もアニメーションも中国原典の「白蛇伝」の不幸な結末とは違う幸福な結末を持っているにもかかわらず、「人と蛇は共存することができない」という観念から逃れることができない。このように、『白夫人の妖恋』と『白蛇伝』は中国古典を受容した一方、その内実に於いては戦後の時代精神および伝統的な思想といったような、さまざまな日本的な要素が含まれているのではないだろうか。

本論文では、『雷峰塔伝奇』との比較によって、『白夫人の妖恋』、及び『白蛇伝』の改作意図を検討した。このような改作は逆にその後の中国語圏の「白蛇伝」映画<sup>41</sup>にどのような影響を与えたかについての分析も必要であると思われるため、それは今後の課題にしたい。

#### 注

- 1 ほかの三つは「梁山伯と祝英台」、「孟姜女」、「牛郎織女」。
- 2 長崎書物改役による『商船載来書目』(1804年)によれば『警世通言』は寛保三年(1743年)に長崎へ船載された記録が認められる。委細は大庭脩 1967年『江戸時代における唐船持渡書の研究』關西大學東西學術研究所研究叢刊〈第1〉参照。
- 3 元末明初から始まった中国の崑山(現在江蘇省蘇州市東部)一帯で流行した戯曲の一形式。『牡丹亭』が有名。

- 4 中国の上海、浙江省など南部地方で多く上演される伝統的な演劇である。いまは中国第二大演劇（第一は京劇）と言われる。『紅樓夢・天上掉下个林妹妹』が有名。
- 5 影后リントイ主演の黄梅調映画。映画会社ショウ・ブラザーズが1956年東映と合作映画『白夫人の妖恋』を作った後、独自製作した「白蛇伝」の映画である。
- 6 中国語原題は『青蛇』。原作は李碧華のファンタジー小説『青蛇』で、主演はジョイ・ウォンとマギー・チャン。
- 7 溝口健二 1998年『『雨月物語』について』〔原文が1953年〕『別冊太陽 映画監督溝口健二 生誕百年記念』平凡社 p.128
- 8 第9回ベルリン市民文化賞、ベニス児童映画祭グランプリ、メキシコ名誉大賞、第9回ブルーリボン特別賞、第12回毎日映画コンクール特別賞、第13回文部省芸術祭奨励賞、1958年度NHK映画（ベストテン別格）、芸術祭団体奨励賞、北海道映画鑑賞会賞などの受賞歴があった。
- 9 柳沢三郎 1957年『『白蛇伝』の変遷に関する覚書』『日本文学』日本文学協会、植田渥雄 1979年『『白蛇伝』考——雷峰塔白蛇物語の起源およびその滅亡と再生』『桜美林大学中国文学論叢』桜美林大学文学部中文学科、富永一登 1987年『『白蛇伝』遡源考——六朝・唐・宋の蛇説話』『学大国文』大阪教育大学国語教育講座・日本アジア言語文化講座、阿部泰記 1995年10月『『白蛇伝』の発展：怪談から報恩譚へ』『アジアの歴史と文化』山口大学アジア歴史・文化研究会、谷口義介 2011年12月・2012年6月・2013年1月『白蛇傳變遷史1・2・3』『學林』中國藝文研究會など。
- 10 近藤忠義 1957-1958年『『白蛇伝』と『蛇性の姪』1～8』『日本文学』日本文学協会、森山重雄 1958年1月『民話と文学の方法——白蛇伝と『蛇性の姪』上・下』『日本文学』日本文学協会、賀静彬 2008年『『蛇性の姪』と白話小説『白娘子永鎮雷峰塔』の比較研究』『東アジア日本語教育・日本文化研究』東アジア日本語教育・日本文化研究学会、中田妙葉 2008年『『蛇性の淫』における人物形象の創作と中国白話小説の影響について』『東洋法学』東洋大学法学会、中田妙葉 2009年『《蛇性之姪》怪異反映出的世界：《白娘子永鎮雷峰塔》与《蛇性之姪》的母題与嬗变』『東洋法学』東洋大学法学会など。
- 11 曾秋桂 2010年11月『異文化接触による物語変容——『白蛇伝』から『崖の上のポニョ』へ』『比較文化研究』日本比較文化学会
- 12 川島郁夫 1998年『『白蛇伝』映画閑談（〈特集〉東アジアの文化と文学）』『総合文化研究 2』東京外国語大学出版会
- 13 本論文は、方成培の『雷峰塔伝奇』を原典として使う。
- 14 『白夫人の妖恋』（カラー映画）：監督：豊田四郎 脚本：八住利雄 製作：田中友幸 撮影：三浦光雄 特撮監督：円谷英二 配給：東宝 公開：1956年6月22日 上映時間：103分、製作国：日本、香港、言語：日本語、出演者：池部良（許仙）、山口淑子（白夫人）、八千草薫（小青）など
- 15 林房雄 1948年『白夫人の妖術』新潮社。『白夫人の妖術』については、勝山稔 2009年12月『近代日本に於ける中国白話小説集「三言」所収篇の受容について——神谷衡平と林房雄の訳業を中心として——』『国際文化研究科論集』第17号 東北大学大学院国際文化研究科参照。
- 16 邱淑婷 2007年『香港・日本映画交流史 アジア映画ネットワークのルーツを探る』東京大学出版会 p.185
- 17 たとえば『蛇妖島』（維達洛監督 1955年）、『蛇魔復仇記』（ジェラルド・デ・レオン監督 1956年 香港・フィリピン合作）など。
- 18 奥野信太郎、豊田四郎、武井武雄 1956年7月『『白夫人の妖恋』を見る（座談会）』『キネマ旬報（149）』p.102
- 19 映画やテレビでの映像合成に用いられる技術。青または緑の布を背景として使い、被写体を背景から分離する。また別に用意されたものを背景にはめ込む。
- 20 当時、東宝は国際映画祭への参加、国際合作映画の企画、世界各地での東宝映画祭の催しなどで積極的に国際的な天界を試みていた。その国際的戦略のなかで、香港はきわめて重要な地位を占めていた。

- 21 ショウ・ブラザーズと大映の合作映画『楊貴妃』について後日、論文「日本映画における中国古典の変容と中国語圏映画への逆影響——溝口健二『楊貴妃』の場合——」を『比較文化研究 No.115』に発表する予定がある。
- 22 『白蛇伝』(カラー映画)：監督・脚本：藪下泰司、製作：大川博、音楽：木下忠司、撮影：塚原考古、石川光明、編集：宮本信太郎、配給：東映、公開：1958年10月22日、上映時間：79分、製作国：日本、言語：日本語、出演者：森繁久彌、宮城まり子など
- 23 浅野俊和 2004年「〈長編漫画映画〉の誕生と終焉：『東映まんがまつり』の社会史」『中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要第5号』参照
- 24 映画用語。物語上の繋がりがあって一つのエピソードを作る一区分のことである。ショットが最小単位で、そのショットの集合がシーンを構成し、さらにそのシーンの集合がシークエンスとなり、シークエンスが繋がりをを持った束となって一つの映画が構成される。なお比較する三作品のうち、確かに『雷峰塔奇伝』は映画ではなく演劇作品であるが、その物語全体を構成するまとまりを持った単位のことを、本論文では便宜上「シークエンス」と呼ぶことにする。
- 25 佐藤忠男 1995年『日本映画史2』岩波書店 p.229
- 26 阿部泰記 1995年『「白蛇伝」の発展：怪談から報恩譚へ』『アジアの歴史と文化』p.18
- 27 たとえば小説『雷峰塔奇伝』(1806年)、弾詞『義妖伝』(1809年)など。
- 28 牧野守 1962年「東映動画誕生に至る経緯とその歴史的背景」『東映十年史——1951~1961』東映 p.58
- 29 浅野俊和は「〈長編漫画映画〉の誕生と終焉：『東映まんがまつり』の社会史」(『中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要第5号』2004年 p.58)では、東映の「第6作まで企画内容については、輸出目的から東洋の作品を原作にするという独自性が見られたものの、自社、あるいは他社製作の劇映画の「後追い企画」的な側面を引きずっていったことは否めず、『安寿と厨子王丸』公開後に起こった労使間の紛争の中では、「〈長編漫画映画〉としての独自性も問われていた」と指摘している。
- 30 豊田四郎 1956年「白夫人の妖恋——女の執念を追求」『キネマ旬報143号』キネマ旬報社 p.75
- 31 佐藤忠男 1995年『日本映画史2』岩波書店 p.271
- 32 たとえば『夫婦善哉』(豊田四郎監督 1955年)のなかの男性主人公・維康柳吉、『ほく東綺譚』(豊田四郎監督 1960年)のなかの中学校教師・種田順平など、どれでも優柔不断で甲斐性のない男で、しっかりしている女性主人公と鮮明な対比担っている。
- 33 たとえば主人公の正は京都へ遊びに行った弟を追って出かけた。美加子も正が忘れていったライターを届けに行くという理由で京都に向った。そこで二人は誤解を解き、恋が始まった。
- 34 黄愛玲 1992年「白夫人の妖恋」『第16回香港国際电影节：節目表及訂票手冊』香港市政局 p.43
- 35 古蒼梧 1992年「乱世奇花話香蘭」『第16回香港国際电影节：李香蘭(山口淑子專題)』香港市政局 p.12
- 36 たとえば「やぶれた約束」の妻、「因果話」の大名の奥方など。
- 37 佐藤忠男 1995年『日本映画史2』岩波書店 p.272~273
- 38 たとえば漢民族が祖神として伝統的に信仰してきた伏羲と女媧は人頭蛇身として表現されているし、漢の高祖にも蛇から生まれたという伝説がまつわりついている。
- 39 諏訪春雄 1992年3月「中国江南の蛇信仰と日本(アジアの祭りと芸能)」『調査研究報告37号』学習院大学 p.28
- 40 奥野信太郎、豊田四郎、武井武雄 1956年7月「『白夫人の妖恋』を見る(座談会)」『キネマ旬報(149)』p.103
- 41 たとえば1962年ショウ・ブラザーズが独力で製作した映画『白蛇伝』(岳楓監督)、1993年の『青蛇転生』(徐克監督)など。